

理想—現実自己の齟齬と自己受容の心理学

藤原 梢* 菅原 正和**

(2010年1月25日受理)

K. Fujiwara and M. Sugawara

Discrepancy of Idea – Real Self and Self Acceptance

I. 問題と目的

2009年6月26日の世界のマスメディアは、一斉に Mickel Jackson の不幸な死を報じた。巨額の富と名声と溢れる才能に恵まれながら、なぜ彼はかくも不幸だったのか？ E.Diener の Subjective Well-being 理論に従えば、self acceptance の低下に起因することになる。極端に度重なる整形手術はそれを物語るかもしれない。

C. R. Rogers は (1961)、心理療法のプロセスにおいてしばしば生起する、かけ離れた理想自己 (ideal self) と現実自己 (real self) の齟齬が、不適応状態にある自己改善の進行に伴って減少していくことに気づいた。この研究を契機として、その後の両自己の研究と解釈は変化していく。Markus と Nurius (1986) の研究以前では、“～でありたい” という positive な理想のみを対象としていたが、加えて Markus と Nurius は “～であることを恐れる” negative な自己も含めて論じるようになる。実現していない自己 “possible self” には positive と negative な表象が含まれている。我が国では遠藤 (1987) が、目的への approach-avoidance の方向性に着目して個別に概念化し、かくありたい自己を “正の理想自己”、かくありたくない自己を “負の理想自己” として様々な認知課題から検討している。そして正の理想自己と現実自己との齟齬よりも、負の理想自己と

現実自己との齟齬のほうが自尊感情との関わりがより強いことを明らかにした。さらに、遠藤 (1992a, b) は、個人にとって重要な自己認知が全体的自己評価と強い関わりをもつことを検証し、個人にとって重要である項目における理想—現実自己の差異スコアが、自尊感情をよく説明するとしている。これは理想自己の項目を研究者側が設定した法則定立的 (nomothetic) な方法 (Moretti & Higgins, 1990) を用いたものである。しかし、理想自己を被験者自ら設定した個性記述的 (idiographic) な方法により、個人にとっての理想自己の重要性を検討している研究がある (Moretti & Higgins, 1990; 水間, 1998)。後者では、自我関与の高い内容が表出される (溝上, 1995) とともに個人のもつ生活空間と関連性の高い内容が表出されるので、研究者側が項目を与えるものよりも個人にとって重要な内容を捉える可能性が高い (溝上, 1995, 1998)。しかし、青年期においては重要性とその意識化は必ずしも同義ではなく (溝上, 1998)、意識されやすいけれども重要でない内容、意識化されにくいけれども重要な内容を含むこともある。後者に関しては、外在的視点 (溝上, 1997) によって捉える方法がある (水間, 1998)。ここで検証されている自尊感情との関係性が強い概念として、自我同一性の下位要素である自己受容 (self-acceptance) がある。

* アルバイワマ KK、** 岩手大学

Rogers (1961) は、理想自己と現実自己の差異として自己受容を考えたが、理想自己には社会的価値が反映されており、社会的望ましさととの関連性から自己受容はとらえられないという見解（上田, 1996）もある。Crowne と Stephens (1961) によれば自己受容は「自己評価における満足の程度」であり、自己受容が自尊感情に含まれる（遠藤, 1992a, 1992b）と考えたり、自己受容の内部に評価次元を想定する（伊藤, 1992a）など、実質的に自尊感情や自己評価意識、自己価値 (self-worth) と同等の扱われ方をすることが多い (Little, 1993)。一方で、Combs ら (1978) は「自己の現実の姿についての正確な観察を行い、その姿をありのままに受け容れること」としている。本邦においても宮沢 (1988) による「自己の側面をありのままに受け容れること」、伊藤 (1992b) による「評価なしにありのままの自己を受け容れること」とあるが、これらの自己受容の定義は必ずしも自己評価に結びついていない。Rosenberg (1986) が自尊感情の2つの内包的概念の一つに関して、自分を“これでよい (good enough)” と考える部分は優越や完全性の意味での自己評価の高低を含まず、上田 (1996) の自己受容に近い内容になっている。長谷川 (1999) は、これらの自尊感情と自己受容との独立性の問題に注目し、これまでの理想的自己に関する考察が多く実証性に乏しい部分の研究に取り組んだ。その結果は、自己受容は自信 (自己信頼) や自己価値、優越といった自己評価との独立性が低いことを示唆した。自己受容は本邦では自己評価と異なる特性として頻繁に取り上げられるのに比して、欧米ではそれほど注目されず、自己評価を高めようとする自己高揚 (self enhancement) や、自己の正当性と能力を主張することが尊ばれる自己主張的 (Jones & Pittman, 1982) な自己呈示による操作傾向が強い。わが国は日本的な自己卑下文化 (高田, 1987) の影響か自己の否定的な面を意識しつつもそれを受容しようとする傾向がある。また、“ひとから後ろ指をさされぬように” “他人様から笑われぬように” などの教えがわれわれの行動に影響力をもつこと

は、日常的に観察され (遠藤, 1992a), 日本人の“否定的側面についての意識が強い” 自己のあり方としての特徴がある。これらは、遠藤 (1992a) の負の理想自己の重要性への関係をうかがわせる。また、理想自己と現実自己の差異スコアと自己受容の関連性に関しての研究もなされてきている。伊藤 (1992b) は自己受容が形成され、変化するプロセスに注目し、自己受容を扱う場合は、差異そのものの大きさよりも、それをどう受け容れるかが問題とされるべきであり、差異と自己受容との間にあるより主観的な変数を解明することが重要であると述べている。新井 (2001) も理想自己と現実自己の差異と自己受容とに関与するもう一つの要素として、不合理な信念を取り上げ、それが媒介変数として影響を与えるかを検証したが、正の理想自己と現実自己の差異が自己受容に与える影響は、不合理な信念によって媒介されているが、負の理想自己と現実自己の差異スコアに関しては、媒介されていないと報告している。不合理な信念や認知的機能の明確さにも問題があるが、いずれの研究も理想自己と現実自己の差異スコアと自己受容との間に媒介変数の関与があることを十分に説明できていない。それ故、理想自己と現実自己の差異を媒介の関与なしに直接的な関連性があるかどうか検討する必要がある。

理想自己と現実自己の差異は自己同一性混乱と関係がある (松田・広瀬, 1982) ので、両自己間の差異と自我同一性の下位要素である自己受容との関連性は予測できる。そこで、本研究では、遠藤 (1992a, 1992b) に倣い、負の理想自己と個人にとって重要な理想自己の重要性の検討を中心に、正・負の理想自己と現実自己の差異と自己受容との関連性を各因子ごとに分析していく。その際、先行研究では、理想自己と現実自己の差異と自己受容との間に媒介変数の明らかな関与が見られないので、理想自己と現実自己の差異と自己受容との間に介在する変数の関与は取り上げず、直接的な関連性を分析する。

また、自尊感情と自己受容との独立性の問題に関して実証的研究が充分になされていないので、

本研究の結果がこれまでなされてきた理想自己と現実自己の差異と自尊感情の結果とどのような関係があるかを探索する。その際、自尊感情を自己受容も含む概念として扱っている遠藤（1992a, 1992b）の理想自己と現実自己の差異スコアの研究を参考にし、それとは逆の考えである自己受容には評価を必ずしも含まないとする宮沢（1988）の自己受容測定スケールを用いて研究を進める。これは、自尊感情と自己受容の独立性の高低の実証的な裏付けとなるであろう。

なお、本研究を実施するにあたって、意識には上りにくいけれども重要な内容をとらえるため、法則定立的(nomothetic)方法によって回答を求め、この中で得られたものを重要な理想自己として扱っていくこととする。理想の領域をわけるにあたって個性記述的(idiographic)な方法だと正確な解釈ができない欠点も考慮し、こちらから理想の領域を規定した状態で提示できる方法を用いることにした。

II. 研究 方 法

被験者：被験者は、東北地方の国立A大学生253名（男子111名，女子142名）。

調査と手続き：自己受容性測定スケール（SAI）および理想—現実自己測定尺度を実施。

(1)自己認知— 林・宮本（1999）は、「その他の人間関係」「パーソナリティ」「ライフスタイル」の3つの理想の領域は、不適応状態を説明する領域であることを示した。林・宮本（1999）の作成した尺度を参考に、A大学の心理学科学生7名で判定し、それぞれ「人間関係」8項目、「パーソナリティ」8項目、「ライフスタイル」8項目からなる、ポジティブ項目（以下、P項目と表記する）24項目とネガティブ項目（以下、N項目と表記する）24項目を用いた。なお、ポジティブ側面における自己認知とネガティブ側面における自己認知とは一次元的な表裏の関係ではない（遠藤，1992a）。

正の理想自己：「あなたは次の項目が表すような人間にどの程度なりたいと思いますか」との教示のもとに、P項目24個をランダムに並べ、それぞれ「とてもなりたい(5)」から「なりたいとは思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。Table 1に領域ごとの項目を示す。

負の理想自己：「あなたは次の項目が表すような人間にどの程度なりたくないと思いますか」との教示のもとに、P項目24個をランダムに並べ、それぞれ「絶対なりたくない(5)」から「なりたくないとは思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。

現実自己：「次の各項目について、どの程度あなたにあてはまると思いますか。」との教示のもとに、P項目・N項目合計48個をランダムに並べ、それぞれ「よくあてはまる(5)」から「まったくあてはまらない(1)」までの5件法で評定を求めた。なお、語尾に関して、理想自己で“～する”であるものは、現実自己では“～している”に修正した。(2)自己受容— 宮沢（1980, 1988）の作成した自己受容性測定スケール（SAI）を用い、SAIは「自己理解」8項目、「自己承認」6項目、「自己価値」6項目、「自己信頼」7項目の合計27項目からなる。これら27項目をランダムに並べ、「あてはまる(5)」から「あてはまらない(1)」までの5件法で評定を求めた。この得点が高いことは、自己受容性が高いことを意味する（宮沢，1988）。

III. 結 果

有効回答は234名（男子96名，女子138名〔年齢範囲18～32歳；平均年齢19.9歳〕）（有効回答率92.13%）。

Table 1 正の理想自己

「人間関係」	
6 .	良い友人に恵まれる
11 .	周りから信頼される
16 .	他人を思いやる
15 .	協調性がある
2 .	人に頼りにされる
12 .	初対面の人ともすぐに仲良くなれる
4 .	周囲の人から受け入れられる
19 .	友人と互いに理解し合える
「パーソナリティ」	
20 .	ユーモアがある
3 .	誠実である
17 .	寛大な心をもつ
14 .	豊かな感性をもつ
8 .	柔軟な思考ができる
22 .	がまん強い
24 .	冷静な判断ができる
7 .	向上心がある
「ライフスタイル」	
18 .	自分自身の生き方をもつ
21 .	充実感のある生活を送る
1 .	気持ちにゆとりのある生活を送る
5 .	将来への見通しがある
9 .	今この時を楽しむ
10 .	自信を持って物事に取り組む
13 .	何事にも挑戦する
23 .	自分の良い面を伸ばそうとする

(1)自己受容性測定スケール (SAI) の因子分析：

宮沢 (1988) の自己受容性測定スケール (SAI) は20年以上経過しているため、これを主因子法(バリマックス回転)により因子分析し直し、結果を Table 2に示した。先行研究では、「自己理解」「自己承認」「自己価値」「自己信頼」の4因子であったが、本研究の因子分析した結果は、『自己価値』(4項目),『自己理解』(5項目),『自己信頼』(5項目),『自己への不満』(4項目)の4因子18項目となった。なお、『自己価値』の全項目(20, 16, 24, 15)と『自己理解』の13, 12, 21, 17を逆転項目とし、それぞれを逆転して加算、自己受容得点とした。『自己への不満』は、宮沢 (1980, 1988) の自己受容の定義「自己の側面をありのままに受け容れること」を受けて、自己内の変えたいところや不満があるところを理解し、それも含めて自己であるという解釈で、逆転項目とはし

なかった。SAIの各側面の α 係数は、『自己価値』で $\alpha = .878$,『自己理解』で $\alpha = .825$,『自己信頼』で $\alpha = .713$,『自己への不満』で $\alpha = .528$ であった。

『自己への不満』において $\alpha = .528$ とやや低いが、他の α 係数は十分に高く満足すべきものといえよう。SAIの各側面ごとの合計値の平均値と標準偏差はそれぞれ『自己価値』($M = 15.77$, $SD = 4.26$),『自己理解』($M = 16.02$, $SD = 4.94$),『自己信頼』($M = 16.89$, $SD = 3.61$),『自己への不満』($M = 15.98$, $SD = 2.26$)であった。

(2)重みづけをした差異スコアと自己受容性との関係：

遠藤 (1992b) は、正の理想自己評定の全反応のうち評定値5の反応は50%を越え、負の理想自己においてもほぼ同様であったので、いずれの5段階評定反応で評定値5をつけた項目を個人の正・負の理想自己において重要な項目とし、評定値が4以下の項目を正・負の理想自己において重

要でない項目とした。本研究では、各評定値の平均度数および割合は評定値5の場合が最も多く、降順に遞減しており、また正の理想自己評定の全反応のうち、評定値5の場合の反応は53.51%、負の理想自己においては44.44%であった。負の理想自己では評定値5の反応が50%をわったが、林・宮本（1999）同様、遠藤（1992b）に倣って、評定値5をつけた項目を個人の正・負の理想自己において重要な項目とし、評定値が4以下の項目を正・負の理想自己において重要でない項目とした。なお、相関、偏相関においては理想自己の個人にとっての重要度を、重回帰分析においては負の理想自己の重要性を検討した。

① 相 関

遠藤（1992a）に倣い、各被験者ごとに正の理想自己評定において評定値5をつけた項目を選んで個人にとって重要な項目とし、それらの項目における現実自己評定値と理想自己評定(5)との差異スコア（これをDpiとする）を

$$Dpi = \sqrt{\sum dpi^2} / npi$$

（ただし、個々の項目における差異をdpiとし、個人にとって重要な項目数をnpiとする）の式により求めた。また、正の自己評定において評定値が4以下の項目における理想自己定値と現実自己評定値との差異スコア（これをDpoとする）を

$$Dpo = \sqrt{\sum dpo^2} / npo$$

（ただし、個々の項目における差異をdpoとし、個人にとって重要な項目数をnpoとする）の式により求めた。理想自己の3領域「人間関係」「パーソナリティ」「ライフスタイル」と自己受容性尺度の4因子の相関をそれぞれ算出した。

自己受容の『自己価値』『自己理解』『自己信頼』の3因子においては、予測どおり、個人にとって重要な項目における正の理想自己と現実自己の差異スコアは自己受容性得点と有意な負の相関関係が見られた。遠藤（1992b）や林・宮本（1999）と同様、“～でありたい”というあこがれの自分と今の自分との間の距離が近ければ自己受容が高いという結果となった。しかし、『自己への不満』においては、個人にとって重要な項目における正

の理想自己と現実自己の差異スコアは自己受容性得点と有意な正の相関関係が見られた。これは、“～でありたい”というあこがれの自分と今の自分との間の距離が近ければ自己に対する不満の認識が低くなるということを表す。即ち、自己に対しての不満や変えたい部分を理解し、Rosenberg（1986）の提唱したように自分を“これでよい(good enough)”と受け容れることができていることにはつながらない。また、ほとんどの個人にとって重要でない項目においても有意な相関関係が見られたが、『自己価値』『自己理解』『自己への不満』の「パーソナリティ」における個人にとって重要でない項目においては有意水準に達しなかった。いずれも個人にとって重要な項目の方が相関係数の値は大きい。N項目を用いた負の理想自己と現実自己の差異スコアと自己受容との関係を検討するため、正の理想自己の場合と同様に各被験者ごとに評定値が5の項目を個人にとって重要な項目、評定値が4以下の項目を重要でない項目として差異スコア（それぞれDni, Dnoとする）を求め、理想自己の3領域と自己受容性尺度の4因子の相関をそれぞれ算出した。“なりたくない”という嫌いな自分と今の自分との間の距離が遠ければ自己受容が高いといえる。しかし、『自己への不満』においては、「パーソナリティ」Dni(4p)では有意水準に達しなかったものの、それ以外の個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアは自己受容性得点と有意な負の相関関係が見られた。P項目と同様、自己に対しての不満や変えたい部分を理解し、“これでよい (good enough)”と受け容れることができていることにはつながらない。また、『自己理解』の「パーソナリティ」「ライフスタイル」、『自己信頼』の「ライフスタイル」における個人にとって重要でない項目においては有意な正の相関関係が見られたが、それ以外の個人にとって重要な項目においては相関は有意水準に達しなかった。いずれも個人にとって重要な項目の方が相関係数の値は大きい。

自己受容『自己価値』『自己理解』『自己信頼』

の3因子においては、予測どおり、個人にとって重要な項目における正の理想自己と現実自己の差異スコアは自己受容性得点と有意な正の相関関係が見られた。

② 偏相関

P・N項目ともに個人にとって重要である項目が個人にとって重要でない項目よりも自己受容尺度の各因子の得点と高い相関があることが明らかになった。しかし、個人にとって重要な項目と重要でない項目における差異スコアは同一被験者内のスコアであることから、遠藤(1992a)と同様、両者間の対応があることを考え、相互に統制した偏相関を求めた。P・N項目すべてで個人にとって重要である項目において、『自己への不満』の「パーソナリティ」Dni(4p)は自己受容との関係が有意水準に達しなかったが、それ以外の個人にとって重要である項目においては、それぞれの差異スコアと自己受容との関係は有意水準に達している。一方、『自己信頼』の「パーソナリティ」

Dpo(3p), 「ライフスタイル」Dpo(3l), 『自己への不満』の「ライフスタイル」Dpo(4l)においては有意水準に達しているものの、それ以外の個人にとって重要でない項目においては、それぞれの差異スコアと自己受容との関係は有意水準に達していない。理想自己のどの領域に関しても個人にとって重要な項目の方が自己受容得点との相関係数の値は大きい。これより、個人の理想と密接な関係のある項目における差異スコアは自己受容と関係が強く、個人の理想との関係が希薄な項目においては自己受容との関係も弱いことが予測される。個人の理想と密接に関わる項目における理想自己と現実自己の差異の水準が、自己受容との関わりをより強く表すことが示唆された。

③ 重回帰分析

(i) 重回帰分析①；理想自己の各領域ごとで、P・N項目の両者において、個人にとって重要である項目と重要でない項目とにわけて自己受容の各因子とどのような関連性があるのかを検討して

Table2 自己受容性測定スケール(SAI)の因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
『自己価値』				
20 # 私は生きていても仕方がない	.901	.237	.129	.006
16 # 私は生まれてこない方がよかった	.879	.206	.124	.054
24 # 私は生きる価値のない人間である	.811	.285	.174	-.025
15 # 私は自分とは違うたれか別の人になりたい	.490	.267	.161	-.301
『自己理解』				
13 # 私には自分の得意なことが何かわからない	.101	.746	.077	.007
12 # 私には人に誇るものが何もない	.322	.701	.049	-.093
21 # 私は自分の長所がわからない	.182	.692	.197	.006
17 # 私は自分のことがわからない	.254	.551	.220	.041
22 私は目標に向かって生活している	.157	-.546	.298	-.016
『自己信頼』				
14 私は困難にぶつかってもそれを克服できる	.226	.315	.622	.043
10 私は自分のことは自分で解決する	-.061	-.007	.520	.046
2 私は自分で決めたことには責任をもつ	.151	.161	.510	-.059
18 私は将来何が起ころうと自分なりにやっけていける	.278	.242	.491	-.012
26 私は自分の才能を生かした人生を送ることができる	.246	.395	.428	-.048
『自己への不満』				
7 私の容姿には変えたいところが多い	-.187	-.217	-.292	.557
27 私は自分の容姿の悪い面がわかる	.041	.041	.047	.533
5 私は自分の短所がわかる	.063	.132	.254	.426
3 私は今の自分に不満である	-.220	-.373	-.280	.404

のついた項目は逆転項目である。

きた。ここでは、これらの理想自己の各領域ごとに、どの変数が最も自己受容の各因子を説明するかを見ていく。なお、すべての自己受容の因子に関して、理想自己のP項目の2項目、N項目の2項目、計4項目の差異スコアを説明変数とし、自己受容の各因子を基準変数として、重回帰分析をおこなった。自己受容の各因子ごとに理想自己の領域別に分析をおこなった結果をTable 7～10に示した。『自己価値』と正の理想自己「パーソナリティ」領域との関係、『自己への不満』と負の

理想自己「パーソナリティ」領域、「ライフスタイル」領域との関係においては、個人にとって重要な項目の関係係数が有意水準に達しなかった。しかし、それらを除いては、個人にとって重要な項目の関係係数が有意水準に達した。それぞれの自己受容の因子、さらに理想自己の領域ごとに、最も高い有意水準に達したのは次のものである。『自己信頼』の「人間関係」領域と『自己への不満』の理想自己3領域では、正の理想自己と現実自己の差異スコアにおける個人にとって重要な項

Table 3 差異スコアと自己受容性『自己価値』との関係（相関）

		相 関	偏 相 関
人間関係	Dpi (1n)	-. 213 **	-. 185 **
	Dpo(1n)	-. 144 *	-. 097
	Dni (1n)	. 478 ***	. 485 ***
	Dno(1n)	-. 052	-. 105
パーソナリティ	Dpi (1p)	-. 147 *	-. 135 *
	Dpo(1p)	-. 093	-. 073
	Dni (1p)	. 304 ***	. 294 ***
	Dno(1p)	. 107	. 068
ライフスタイル	Dpi (1l)	-. 350 ***	-. 328 ***
	Dpo(1l)	-. 138 *	-. 045
	Dni (1l)	. 381 ***	. 365 ***
	Dno(1l)	. 125	. 046

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

Table 4 差異スコアと自己受容性『自己理解』との関係（相関）

		相 関	偏 相 関
人間関係	Dpi (2n)	-. 162 *	-. 128 *
	Dpo(2n)	-. 158 *	-. 124
	Dni (2n)	. 428 ***	. 425 ***
	Dno(2n)	. 061	. 028
パーソナリティ	Dpi (2p)	-. 252 ***	-. 241 ***
	Dpo(2p)	-. 103	-. 069
	Dni (2p)	. 337 ***	. 323 ***
	Dno(2p)	. 149 *	. 109
ライフスタイル	Dpi (2l)	-. 525 ***	-. 491 ***
	Dpo(2l)	-. 243 ***	-. 119
	Dni (2l)	. 539 ***	. 509 ***
	Dno(2l)	. 285 ***	. 202

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

目で、それ以外では負の理想自己と現実自己の差異スコアにおける個人にとって重要な項目であった。後者に関しては、遠藤（1992a）の負の理想自己のほうが正の理想自己より自己評価における内的基準として機能する可能性を支持する結果となった。

（ii）重回帰分析②：理想自己すべての変数の中で、どの変数が最も自己受容の各因子を説明するかを見ていく。なお、すべての自己受容の因子に

関して、理想自己と現実自己のP項目6項目、N項目6項目、計12項目の差異スコアを説明変数とし、自己受容の各因子を基準変数として、重回帰分析をおこなった。『自己価値』『人間関係』のDpi, Dni, 「パーソナリティ」のDno, 「ライフスタイル」のDpi, Dniで標準回帰係数が有意水準に達した。最も高い水準にあったのは「人間関係」におけるN項目の個人にとって重要である項目であった。また、「人間関係」「ライフスタイル」

Table 5 差異スコアと自己受容性『自己信頼』との関係（相関）

		相 関	偏相関
人間関係	Dpi (3n)	-.289 ***	-.262 ***
	Dpo(3n)	-.155 *	-.091
	Dni (3n)	.272 ***	.275 ***
	Dno(3n)	-.030	-.055
パーソナリティ	Dpi (3p)	-.276 ***	-.255 ***
	Dpo(3p)	-.203 **	-.171 **
	Dni (3p)	.272 ***	.263 ***
	Dno(3p)	.089	.053
ライフスタイル	Dpi (3l)	-.362 ***	-.316 ***
	Dpo(3l)	-.243 ***	-.159 *
	Dni (3l)	.366 ***	.348 ***
	Dno(3l)	.135 *	.060

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

Table 6 差異スコアと自己受容性『自己への不満』との関係（相関）

		相 関	偏相関
人間関係	Dpi (4n)	.277 ***	.255 ***
	Dpo(4n)	.131 *	.068
	Dni (4n)	-.161 *	-.172 **
	Dno(4n)	-.109	.124
パーソナリティ	Dpi (4p)	.248 ***	.234 ***
	Dpo(4p)	.124	.091
	Dni (4p)	-.097	-.107
	Dno(4p)	-.062	.077
ライフスタイル	Dpi (4l)	.345 ***	.304 ***
	Dpo(4l)	.214 **	.131 *
	Dni (4l)	-.195 **	-.180 **
	Dno(4l)	-.093	-.052

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

においては、P・N項目両者で個人にとって重要である項目が有意水準に達した。なお、説明率(R²)は.308であった (Table 7)。『自己理解』 「ライフスタイル」のP・N項目両者で個人にとって重要である項目において標準回帰係数が有意水準に達した。最も高い水準にあったのは「ライフスタイル」におけるN項目の個人にとって重要である項目であった。なお、説明率 (R²) は .475と高水準に達した (Table 8)。『自己信頼』 「人間関係」の

Dpi, 「パーソナリティ」のDpi, Dpo, Dno, 「ライフスタイル」のDniで標準回帰係数が有意水準に達した。最も高い水準にあったのは「ライフスタイル」におけるN項目の個人にとって重要である項目であった。なお、説明率 (R²) は .295であった (Table 9)。『自己への不満』 「人間関係」のDpi, 「ライフスタイル」のDpiにおいて標準回帰係数が有意水準に達した。最も高い水準にあったのは「人間関係」におけるP項目の個人にとって

Table 7 差異スコアと自己受容性『自己価値』との関係 (重回帰分析)

		重回帰β係数		R ²
		①	②	
人間関係	Dpi (1n)	-.174 **	-.158 *	.259
	Dpo(1n)	-.040	-.008	
	Dni (1n)	.471 ***	.328 ***	
	Dno(1n)	-.076	-.102	
パーソナリティ	Dpi (1p)	-.111	.011	.116
	Dpo(1p)	-.140 *	-.053	
	Dni (1p)	.293 ***	.054	
	Dno(1p)	.115	.134 *	
ライフスタイル	Dpi (1l)	-.269 ***	-.138 *	.200
	Dpo(1l)	-.012	-.015	
	Dni (1l)	.311 ***	.159 *	
	Dno(1l)	-.003	.006	

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

①; 領域別に分析をおこなった, ②; 3領域まとめて分析をおこなった

Table 8 差異スコアと自己受容性『自己理解』との関係 (重回帰分析)

		重回帰β係数		R ²
		①	②	
人間関係	Dpi (2n)	-.120 *	-.061	.197
	Dpo(2n)	-.092	-.019	
	Dni (2n)	.408 ***	.114	
	Dno(2n)	.048	.031	
パーソナリティ	Dpi (2p)	-.214 ***	-.066	.186
	Dpo(2p)	-.152 *	-.070	
	Dni (2p)	.314 ***	.035	
	Dno(2p)	.162 *	.106	
ライフスタイル	Dpi (2l)	-.378 ***	-.302 ***	.456
	Dpo(2l)	-.067	-.053	
	Dni (2l)	.407 ***	.355 ***	
	Dno(2l)	.110 *	.084	

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

①; 領域別に分析をおこなった, ②; 3領域まとめて分析をおこなった

重要である項目であった。なお、説明率 (R^2) は .159であった (Table 10)。

以上より、『自己価値』では「人間関係」におけるN項目の個人にとって重要である項目の理想自己と現実自己の差異スコアが、『自己理解』『自己信頼』では、「ライフスタイル」におけるN項目の個人にとって重要である項目の理想自己と現実自己の差異スコアが、『自己への不満』では「人

間関係」におけるP項目の個人にとって重要である項目の理想自己と現実自己の差異スコアが、それぞれ最も高い水準で有意であった。

IV. 考 察

(1) SAI 因子分析結果の考察

第1因子『自己価値』には、先行研究では「自

Table 9 差異スコアと自己受容性『自己信頼』との関係 (重回帰分析)

		重回帰β係数		R ²
		①	②	
人間関係	Dpi (3n)	-.259 ***	.154	.295
	Dpo(3n)	-.060		
	Dni (3n)	.253 ***		
	Dno(3n)	-.027		
パーソナリティ	Dpi (3p)	-.229 ***	.180	.295
	Dpo(3p)	-.237 ***		
	Dni (3p)	.259 ***		
	Dno(3p)	.138 *		
ライフスタイル	Dpi (3l)	-.253 ***	.212	.295
	Dpo(3l)	-.126 *		
	Dni (3l)	.278 ***		
	Dno(3l)	.015		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

①; 領域別に分析をおこなった, ②; 3領域まとめて分析をおこなった

Table 10 差異スコアと自己受容性『自己への不満』との関係 (重回帰分析)

		重回帰β係数		R ²
		①	②	
人間関係	Dpi (4n)	.254 ***	.095	.159
	Dpo(4n)	.037		
	Dni (4n)	-.152 *		
	Dno(4n)	.101		
パーソナリティ	Dpi (4p)	.228 ***	.063	.159
	Dpo(4p)	.084		
	Dni (4p)	-.096		
	Dno(4p)	.042		
ライフスタイル	Dpi (4l)	.285 ***	.129	.159
	Dpo(4l)	.117		
	Dni (4l)	-.102		
	Dno(4l)	-.004		

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

①; 領域別に分析をおこなった, ②; 3領域まとめて分析をおこなった

己承認」の項目であった「私は自分とは違うだけか別の人になりたい」も含まれるが、自分に価値を見出せないでいるものほど自分よりも価値のある誰か別の人になりたいと志向するので、「自己価値」の項目とした。第2因子『自己理解』は、先行研究では「自己理解」「自己価値」「自己信頼」の項目が混同している。「自己価値」の「私には人に誇るものが何もない」に関しては、自分の誇れるものを見出す段階として自己理解ができているか否か、「自己信頼」の「私は目標に向けて生活している」に関しては、自分の目標が何かを見出しているか否かという点で自己理解ができているかどうかにつながるので、『自己理解』の項目とした。本研究において新たな因子として得られた第4因子『自己への不満』は、何れも自己を変えたい部分や悪いと感じている部分に関しての項目であったため、それらは自己に対する不満を認識していると考え『自己への不満』と命名した。しかし、自己受容性を「自己の諸側面をあるがままに受け容れること」と定義するため、先行研究において「自己理解」の項目であった「私は自分の容姿の悪い面がわかる」と「私は自分の短所がわかる」に関しては、自己のnegativeな側面を理解しているかどうかという意味で宮沢(1980, 1988)は逆転項目とはしていない。しかし、この解釈で逆転項目を決定すると α 係数が $\alpha = .224$ と非常に低くなる。このことから、この因子に関しては自己への不満を自己の諸側面としてそのまま受け容れるということのみを測ることができるのではなく、自己に対する不満があるかどうかということも含めて測定する結果となったと思われる。水間(1998)によると、「理想自己(本研究における正の理想自己)と現実自己の齟齬の大きさが自己評価と有意な負の相関を示し、個人にとってかかる齟齬は自己評価を低下させる」という。本研究においては、『自己への不満』因子は自己評価を含んでおり、自己の否定的側面の存在を把握、理解するだけでなく、それを認め、すべて含めて自分なのであると納められたとき、「自己の諸側面をあるがままに受け容れる」(宮沢、

1988) という意味での自己受容ができていると推察される。『自己への不満』および“自己受容”は、宮沢による自己受容とは性質を異にし、自己の否定的側面の存在を把握、理解していてもそれを受容できない学生が多い。

(2) 重みづけをした差異スコアと自己受容性

個人にとって重要な項目における理想自己と現実自己の差異スコアの重要性、相関、偏相関の結果から、自己受容の『自己への不満』と負の理想自己「パーソナリティ」領域との相関関係においては、有意でなかったが、それを除く個人にとって重要な項目においては、P、N項目ともに理想自己と現実自己の差異スコアは自己受容性得点と有意な相関関係が見られた。一方、偏相関において、ほとんどの個人にとって重要でない項目では、それぞれの差異スコアと自己受容との関係は有意な水準に達していなかった。即ち各個人が抱える理想と密接に関わる項目における理想自己と現実自己の差異の水準が、自己受容と強い関わりをもつことが示され、遠藤(1992a)の研究を支持している。

『自己への不満』と理想自己「パーソナリティ」Dni(4p)の関係においては、個人にとって重要な理想自己であっても有意な相関が見られなかった。しかし同じ「パーソナリティ」領域でもP項目における個人にとって重要な項目の理想自己と現実自己の差異は、高い相関が見られた。水間(1996)によると、自己を嫌悪するという否定的態度の強い者は、自己の否定的側面が気になり、そこからの意識の転換ができず、同時に自己の否定的部分の変容に対する積極的な取り組みの姿勢があるという。「パーソナリティ」は自己に関する、極めて主観的な領域であり、「人間関係」「ライフスタイル」に比べて、自ら“～でありたい”と正の理想を抱き、現実自己との距離を近づけようとするれば実現しやすい領域である。かくして自己の否定的側面に積極的に取り組む姿勢を含んだ『自己への不満』と「パーソナリティ」領域のP項目とは強い関係が見られ、N項目においては有意な相関が認められなくなると推察される。

① 負の理想自己と現実自己の差異スコアの重要性

重回帰分析①では、個人にとって重要な項目に加え、負の理想自己の重要性を見てきた。個人にとって重要な項目に関しては、先行研究と同様P、N項目ともに標準化係数が有意水準に達したが、『自己価値』と『自己への不満』でいくつか有意ではなかった。また負の理想自己の重要性に関して、『自己価値』『自己理解』『自己信頼』においては先行研究を支持するが、『自己への不満』に関しては、負の理想自己よりも正の理想自己がより強く自己受容『自己への不満』を説明した。

有意に達しなかった『自己価値』と正の理想自己「パーソナリティ」領域、『自己への不満』と負の理想自己「パーソナリティ」領域、負の理想自己「ライフスタイル」領域、いずれにおいてももう一方の個人にとって重要な項目は充分高い水準で有意に達している。このことから、もう一方の個人にとって重要な項目における理想自己と現実自己との差異がそれぞれの自己受容の因子にとって非常に強い影響力を有すると思われる。即ち、理想自己の『自己価値』は負の理想自己と、『自己への不満』は正の理想自己との関係が強いことをより顕著に説明している。

P項目がN項目よりも自己受容をより強く説明する理由について述べる。理想自己の「人間関係」領域と『自己信頼』との関係では、正の理想自己と現実自己の差異スコアにおける個人にとって重要な項目 $Dpi(3n)$ は $\beta = -.259$ ($p < .000$) であり、負の理想自己と現実自己の差異スコアにおける個人にとって重要な項目 $Dni(3n)$ は $\beta = .253$ ($p < .000$) で、有意な差は見られない。『自己への不満』においては、理想自己の3領域すべてでP項目の個人にとって重要な項目が最も高く、この因子に関しては、遠藤(1992a)とは異なる結果となっている。「パーソナリティ」と「ライフスタイル」においては、N項目が個人にとって重要な項目であっても有意に達しなかった。自己の否定的側面を受け容れるということは、自らが“かくありたくない”と願って行動したり思考したりしてそれ

に近づかないようにすることよりも、“かくありたい”と願いながら行動や思考をし、それを成し遂げたりその理想に近づいたりすることのほうがより深い関わりがあると考えられる。水間(1996)による自己を嫌悪するという否定的態度の強い者は、自己に対しての否定的な評価に積極的一面があるという指摘がある。これを受けて、『自己への不満』は評価を含む因子で、“かくありたい”という正の理想自己を抱きそれに近づこうとすることがここで示されている積極的な取り組みになり、それと現実自己の差異との関連性が負の理想自己と現実自己との関連性よりも強いという結果を示すこととなった。

② 自己受容の各因子を説明する理想自己の領域 重回帰分析

②では、どの理想自己の領域が自己受容の各因子を最も説明するかを検討した。『自己価値』で有意傾向にあったものの中で、「人間関係」と「ライフスタイル」において、P・N項目両者に関して個人にとって重要な項目である理想自己と現実自己の差異スコアが有意水準に達したこと、さらに理想自己の領域全体を通しての分析であったにも関わらず、それぞれP項目よりN項目のほうがより高水準であったことに注目する。遠藤(1992a, 1992b)は、理想自己と現実自己の差異スコアと自尊感情との関係で、負の理想自己と個人にとって重要である理想自己の重要性を示唆したが、ここでは self esteem の訳語として自尊感情を自己評価と併用している。自己に対する価値づけ査定によって形成した自己認識、すなわち自尊心の意味で用いていることから、本研究の『自己価値』において同様の結果が得られたことは、理想自己と現実自己の差異と“価値づけ”との関連性が大きいといえる。また、最も高い水準に達したのは、負の理想自己の「人間関係」領域の個人にとって重要な項目である。梶田は「現代のような大衆社会状況においては、自らの周囲との人間関係の維持を最大関心事とし、他の人達が何をおこなうか、を基準として自らの行動を決定する他人志向型の人々が大多数を占めるに至っている」「人は、

自らに対して何らかの意味づけと価値づけを与えないでは生きていくことができない。このような意味づけは、しかしながら、周囲の人から注がれるまなざし、あるいはその人の内面に想定された何者かのまなざしにその基盤を持つことが多いのである」(梶田, 1980)と述べるように、『自己価値』と「人間関係」には、強い関連性がある。周囲から孤立したくない、避けられたくないと強く思うことは、周囲と同じことをすることで安心感を得たりする傾向のある日本人としては、容易に想像がつく。それだけに、そのような「人間関係」における重要な負の理想自己と現実自己の間に大きな齟齬が生じると『自己価値』をも低くしてしまう。『自己理解』では「ライフスタイル」のP、N項目両者に関して個人にとって重要な項目である理想自己と現実自己の差異スコアが有意であった。また、P項目よりN項目がより高水準で有意であったことより、ここでも負の理想自己の重要性を支持する結果となっている。学生時代の目標や就職など将来への見通しや時間的展望の中で、“かくありたい”と思う自己像に近づくことは、自己の誇れる部分や長所などを理解していることにもつながる。この場合自らのpositiveな側面に対する自覚が大きくなるが、“かくありたくない”という自己像を抱きながらもそうになってしまっている場合、なりたくない自己になぜなってしまうのかということに注目するため、誇りや長所ではなく自己そのものに対してnegativeになり易い。『自己信頼』では「ライフスタイル」におけるN項目の個人にとって重要な項目である理想自己と現実自己の差異スコアが最も高い水準で有意であった。理想自己のN項目の項目内容が目標や生活の充実感、将来に対する希望について問うのに対し、『自己信頼』に関しても自らの効力感や人生における自己への信頼を問うので、関連性が高くなることは容易に想像できる。また、「パーソナリティ」においては、N項目の個人にとって重要な項目の理想自己に関して有意でなかったが、それ以外は有意水準に達した。自己の誠実性や責任感、向上心などに対する理想自己と現実自己との差異は、

大学生において、親元から離れ独立し、自己責任で物事を乗り越えていくことを考慮すると、自分ならばどんな困難も乗り越えられる、成功するといった自己への信頼につながるだろう。今回、個人にとって重要でない項目においても有意な水準に達したことは、従来の研究を支持しない。これは、「パーソナリティ」という概念が明確化されていないことにも関係するのかもしれない。静的で安定したものなのか、それとも感情、行動、認知を説明する不安定なものなのか。さらなる検討の必要性も示唆される。

『自己への不満』では「人間関係」と「ライフスタイル」において、P項目の個人にとって重要な項目である理想自己と現実自己の差異スコアが有意水準に達した。最も高い水準で有意であったのは「人間関係」P項目の個人にとって重要な項目である理想自己と現実自己の差異スコアである。重回帰分析(i)の結果から『自己への不満』因子には自己評価の意味も含むことが予測されるが、自己内での自己に対する不満と他者から見てどうかという他者の目(評価)を介した自己に対する不満とが共存していることが考えられる。上野ら(1994)は、友人への同調性が高い群に共通する特徴として、「他者の視線を強く意識していること」を見出し、「友人からの評価懸念の強さが、同調的な態度を引き起こしている」とまとめている。このことからいえるように、相手からの評価を気にするということは、自分自身のあり方への満足感が低く、自分らしさ、自分への自信を見出せないことともつながるのではないか。逆に、自己の否定的部分の変容に対しては積極的な取り組みの姿勢があるという水間(1996)の指摘を考慮すると、他者から信頼されたい、受け容れられたいという理想を強くもち、現実自己との距離も近ければ、他者からの受容によって自己の否定的側面を受け容れたり、あるいは自己に否定的側面が少ないととらえたりすることにつながるのではないだろうか。本研究の結果からは、後者の見解が顕著に表れたといえるだろう。

本研究は、自己受容を説明するに際しての理想

自己のネガティブ項目と個人にとって重要である項目の重要性を検証しながら、さらに自己受容と理想自己の側面ごとの関連性を見ていくことを目的とした。先行研究による負の理想自己と現実自己との差異が正の理想自己と現実自己との差異よりも自尊感情（自己概念全体うちの自己評価に関わる部分）とより関係性が強いこと、さらに個人にとって重要な理想自己がそれを説明するのに重要であることを本研究では自尊感情の代わりに自己受容を取り上げて検討してきた。その結果、『自己への不満』においてP項目がN項目よりも自己受容得点との関係が強かったことを除き、それ以外の自己受容の3因子においては、N項目がP項目よりも自己受容得点とより関連性があり、先行研究を支持する結果となった。また、個人にとって重要な項目における理想自己と現実自己の差異が個人にとって重要でない項目におけるそれよりも自己受容との関係性をより強く説明することも示唆された。

加えて、自己受容と自尊感情との関連性については、『自己価値』『自己理解』『自己信頼』において、理想自己と現実自己の差異スコアと自尊感情との関連性を示唆した遠藤（1992a, 1992b）を支持する結果となったことから、自尊感情と自己受容は、長谷川（1999）が述べたように、独立性が低いことが示唆されたといえるのではないか。『自己への不満』に関しても差異スコアとの関連性が強いのがP, N項目逆であったが、個人にとって重要な項目における理想自己における差異スコアは他の3因子と同様の結果となったことや“評価”を含む因子である可能性を考慮すると、自尊感情と関連していると考えられる。しかし、この“満足・不満”についてと自己受容の定義に関しては、自己評価との関連性も交えて今後さらなる検討の必要性がありそうだ。

また、本研究の結果を通して、「ライフスタイル」と「人間関係」における理想自己と現実自己の差異スコアが強く自己受容に関連していることがわかる。どちらも大学生が重視する領域であるだろう。自由だからこそ、自分の手に委ねられた時間

をどう有意義なものとするか、その中でどのような目標を見出せるか、それを将来にどのようにつなげるか、すべて自己責任であるし、やろうとすること、やったこと、すべてが自己に対する感情、認識につながっていく。また、中学生では“浅く-広く”、高校生では“深く-広く”、大学生では“深く-狭く”の同姓との友人関係が築かれることが多い（落合・佐藤, 1996）という。“深く-狭く”という人間関係の中で、相手に受け容れられるような自己に強い理想を抱くことは、ごく当たり前のことだろう。さらに、校内の友人以外にアルバイトなどで自分とは年齢も立場も異にするような人と関わりをもつことも多いだろう。社会の一員として働く中で、学生とは違う上下関係もあるだろうし、顧客を相手にすることもあるだろう。大学生という立場にありながら、それ以外の多くの他者との関わりをもつ中で、状況に合った自己を作り上げる要素の一つに理想自己があるのかもしれない。このように、自己受容の各因子が関連性の強い理想自己の領域はそれぞれ異にしたが、関連性の強い理想自己の領域は大学生において重要視されるであろう「人間関係」と「ライフスタイル」に偏った結果となった。自尊感情との関わりを強く有すると考えられる自我同一性は、特に青年期内で発達の個人差が大きい（加藤, 1989; 都築, 1993）という。理想自己を領域別にとらえ、発達の的に検討していくことが期待される。

References

- 1) 新井幸子 2001 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心理学研究, 72, 315-321.
- 2) Combs, A. W., Avila, D. L., & Purkey, W. W. 1978 *Helping Relationships: Basic Concepts for the Helping Professionals*. Allyn & Bacon, Inc., (大沢・菅原訳：援助関係, ブレーン出版).
- 3) Crowne, D. P. & Stephens, M. W. 1961 Self-acceptance and self-evaluative behavior. A critique of methodology. *Psychological Bulletin*, 58, 104-121.

- 4) 遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究, 58, 289-294.
- 5) 遠藤由美 1992a 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- 6) 遠藤由美 1992b 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 7) 長谷川博一 1999 自尊心・自己受容の独立性の検討と安定・不安定成分の分離—自尊心態度・感情尺度の作成— 東海女子大学紀要, 19, 187-199.
- 8) 林恵美・宮本正一 1999 不適應の指標としての理想自己と現実自己のズレ 岐阜大学 教育学・心理学研究紀要, 14, 77-84.
- 9) 伊藤美奈子 1992a 自己受容と性格特性との関連についての一考察 心理学研究, 36, 205-208.
- 10) 伊藤美奈子 1992b 自己受容を規定する理想—現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.
- 11) Jones, E. E. & Pittman, T. S. 1982 Toward a general theory of strategic self-presentation. In J. Suls (Ed.), Psychological Perspectives on the Self. Vol.1. Hillsdale, NJ. : Lawrence Erlbaum Associates.
- 12) 梶田毅一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 13) 加藤厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, 60, 184-187.
- 14) Little, B. R. 1993 Personal projects and the distributed self : aspects of a conative psychology. In J. Suls (Ed.) Psychological Perspectives of the Self. Vol.4. Hillsdale, NJ. :Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 157-185.
- 15) Markus, H. 1983 Self-knowledge : An Expanded View. Journal of Personality, 51, 543-565.
- 16) Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible self. American Psychologist, 41, 954-969.
- 17) 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, 30, 157-161.
- 18) 宮沢秀次 1980 青年期における自己受容性測定スケールの検討 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 516-517.
- 19) 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 20) 溝上慎一 1995 why 答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報, 4, 61-72.
- 21) 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因と SELF-ESTEEM との関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係— 教育心理学研究, 45, 62-70.
- 22) 溝上慎一 1998 「自己」の基礎理論—心理学の実証的パラダイムを検証する— 金子書房
- 23) 水間玲子 1996 いやな自己への向き合い方の自己嫌悪感による違いの検討 日本発達心理学会第7回大会発表論文集, 208.
- 24) 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, 46, 131-141.
- 25) Moretti, M. M., & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. Journal of Experimental Social Psychology, 26, 108-123.
- 26) 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 27) Rogers, C. R. 1961 On Becoming a Person. Boston : Houghton Mifflin.
- 28) Rosenberg, M. 1986 Self-concept from Middle Childhood Through Adolescence. In J. Suls & A. Greenwald(Eds.), Psychological Perspective on the Self. Vol.3. Hillsdale, NJ. : Lawrence Erlbaum Associates.
- 29) 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下傾向 実験社会心理学研究, 27, 27-36.

- 30) 都築学 1993 大学生における自我同一性と
時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 31) 上田琢哉 1996 自己受容概念の再検討—自
己評価の低い人の“上手なあきらめ”として心
理学研究, 67, 327-332.
- 32) 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富讓
1994 青年期の交友関係における同調と心理的
距離 教育心理学研究, 42, 21-28.